

蒙古合戦と「神風」

——用語「神風」の使用実態をめぐって——

竹 居 明 男

はじめに——問題の所在——

鎌倉時代後期の、蒙古合戦（いわゆる元寇Ⅱ文永・弘安の役）をめぐっては、一連の合戦の背景・経過・影響のみならず、社会的・文化史的意義等、さらにはアジア史ないし世界史的視野からの位置付け等々、これまでに膨大な研究蓄積がある。

小稿は、その中で、文永・弘安の役（以下、文永合戦・弘安合戦の表記を用いる）の2度の合戦において襲来軍の撃退に大きな影響を果たしたとされる気象状況、すなわち古来喧伝されてきた「神風」の問題に絞って論じるものである。

※以下、小稿は、平成二十六年六月二十八日に行なった日本宗教文化史学会第十八回大会（於京都府立大学）の記念講演「鎌倉時代後期の天神信仰・二題——「天神信仰編年史料集成統編（稿）」作成作業から——」のうち「二、蒙古襲来と「神風」——薩摩国天満宮・国分寺関係史料と、その位置——」に基づいて成稿したもの

であるが、本体をなす史料提示の箇所は、かなりの増補とわずかの訂正をほどこした。末尾の参考文献も、上記講演以後のものを含め、追加している。なお小稿では、蒙古合戦以前に広く使用が認められる「神風（かむかぜ、かみかぜ）」の原義については大方省略しているので、各種の事典類を参照されたい。

さて蒙古合戦をめぐる「神風」の問題と云えば、従来の研究はほぼ例外無く、「神風」と称された気象現象の有無——とりわけ、それらが「台風」か否か——の判定が第一であり、第二に、その判定結果に基づいて両度の合戦の実相を探ろうとするものであり、その気象現象そのものが何時から「神風」と称されたのか、また「神風」なる用語は実際どの程度使用されたのかについて、各種の史料に則して究明したものは意外にも皆無と言つてよいのではなかろうか。

そうした現状の結果、例えば、昨年平成二十九年に放映されたある民放テレビ番組では、江戸時代以前では『大日本史』の「大風」表記に言及があっただけで、明治・大正時代の教科書にも見えないことが強調されていたが、これは、すでに指摘のある初見史料や、以下の小稿で示す作業結果とは明らかに齟齬が生じる結果となっている（ちなみに大正九年の『尋常小学国史』には「神風」の語が使われている）。

一方、それとは逆に、事典類では、ほぼ例外なく「二度にわたる蒙古襲来がいずれも暴風により退けられたところから、この暴風を神威の現れとみて、神風と称するようになった。」、あるいは「神々の参戦を示す「神風」の所為とみなされた」（山川出版社版『日本思想史辞典』）というような趣旨が書かれており、二度の合戦後間もなくから「神風」の語が普及していったかのようにも読めてしまうが、こういう記述も根拠を明示したものではなく、やはり曖昧さは拭えない。こうした、言わば両極端の説明は、上記のような研究上のエア・ポケットの結果であり、結論を先取りすれば、どちらも実態にはそぐわないというのが以下に展開する私見である。

繰り返しになるが、小稿は、そうした従来の研究上のエア・ポケットに着目し、蒙古合戦をめぐる「神風」の用語の使用実態について、『伏敵編』を始め従来の諸研究の成果に導かれながら、可能な限り史料を博搜した結果を提示するのが主たる目的であるが、今回提示し得た史料は公刊されたものに限られていることは、あらかじめお断りしておきたい。

したがって小稿は、二度の合戦に際しての「大風」・「暴風」現象自体の有無や合戦の結果との関わり、また、それが「台風」か否かを、文献批判ならびに気象学上から問うような議論には深入りしないが、記述の前提として簡潔に振り返っておきたい。

私見では、まず二度目の弘安合戦に際しては、諸史料によって「台風」があったことは、研究史上、早くから広く認められているものと考えている。合戦の経過の焦点は以下の通りである。

弘安四年（一二八一）

七月七日、東路軍及び江南軍先遣隊、平戸に到り、江南軍主力と合流。

七月二十七日、江南・東路両軍、平戸から鷹島に移る。

閏七月一日（元では八月一日）未明、台風が通過し、元船が漂没する。

なお付言するならば、『勘仲記』の増補史料大成本に欠けていた弘安四年閏七月一日条と二日条の前半が、近年刊行された史料纂集本で明らかとなり、前者の閏七月一日条には

雨降、参祖母禅尼、入夜暴風大雨如沃如叩、終夜不休、匪直也事也、

と見え、また後者によって、従来知られていた

去夜（夕の1字を抹消）終夜風雨太、今日天氣快晴、神鑑炳焉之至、勅願成熟之基也、

という記事が閏七月二日の記事であることが、より明白となり、閏七月一日夜から二日にかけて京都でも「暴風雨」が観測されたことは、「台風」説を一層補強するものと言えよう。

さて次に、古来問題とされてきたのは一度目の文永合戦で、合戦の経過の焦点は以下の通りである。

文永十一年（一二七四）

十月十九日（太陽暦十一月二十五日）、元軍が博多湾に侵入し、艦船を集結させる。

十月二十日（同上十一月二十六日）、早朝に元軍が次々に上陸開始。

十月二十一日（同上十一月二十七日）、遠征軍の艦船、博多湾から姿を消す。

十一月二十七日、日本遠征軍の敗残兵、合浦に帰還。

こうした経過に関して、遠征軍の敗因として、何らかの暴風が吹いたのかどうか、また、吹いたとしても、それは「台風」なのかどうか議論されてきたことは、よく知られている。この点に、新たな知見を加える能力は私にはないが、私なりに研究史をたどってみた限りでは、旧暦十月二十日の未明に（一説には、二十日の夜から二十一日にかけて、遠征軍が博多湾から「自主撤退」し、湾外のどこか―壱岐、対馬、あるいはその他の地域―に撤退中に）、台風ではないが、季節はずれの低気圧による暴風（突風）が吹いたのは事実であり、しかし、それが遠征軍の決定的な敗因とは言えない、というのが最も穏当な説と判断している。後に引用する『勘仲記』文永十一年十一月六条の記事は、やはり無視できないと考える。

では、以上を前提に、次に文永・弘安両合戦のそれぞれに分けて、上記の問題意識に基づいた調査結果を提示していきたいと思う。

一、文永合戦と「大風」・「暴風」(「神風」)

まず、文永合戦において何らかの「暴風(大風)」があったことに言及している史料、及び、それに準じる史料の該当記事を抜粋して提示する。なお今回の作業のポイントの一つとして、文永合戦そのものに言及の無い史料は論外としても、文永合戦に関する記事があるにもかかわらず、「暴風(大風)」の類には全く言及のない史料についても網羅を期し、それらは史料名のみを掲載した。

史料の配列は年代順を心がけたが、古記録・古文書以外の典籍類については、成立年代未詳のものも少なくなく、厳密な年代順には必ずしもなっていない場合が少なくないであろうことを諒とされたい。史料自体の遺漏等も含め、識者の御示教を待つて今後とも補正を期す所存である。

なお() 内は引用の典拠で、記事中の 〈 〉 内は原文において小字または小字割注であることを示す。
また「神風」表記が有る史料の名称には通し番号と◆の記号とを付した。

なおまた、以上の諸点は次項の弘安合戦の場合も基本的に同様であることを、あらかじめお断りしておきたい。

・『勘仲記』文永十一年(一二七四)十一月六日条(史料纂集)

或人云、去比、凶賊船数万艘浮海上、而俄逆風吹来、吹帰本国、少々船又馳上陸上、仍大頼郎從〔式部大夫―傍書〕等凶賊五十余人許令虜掠之、皆擲置彼輩等、(以下、―「内は裏書」)「六日下、召具之、可令参洛云々、逆風事、神明之御加被歟、無止事可貴、其憑不少者也、近日内外法御祈、諸社奉幣連綿、無他事

云々、」

①建治元年（一二七五）十二月三日付官宣旨（薩摩国天満宮古文書写、薩藩旧記前編卷七。新修国分寺の研究第六卷。鎌倉遺文にも一二一六三号として掲載）◆

左弁官下大宰府

応令管薩摩国造進当国天満宮并国分寺事

右、得彼宮寺所司等去月日奏状稱、……所奉敬天満天神者觀音化身、大聖觀世音又大自在天神御本体也、然者云天満宮、云国分寺、不可不被造営歟、就中蒙古凶賊等来着于鎮西雖令致合戦、神風荒吹、異賊失命、乗船或沈海底、或寄江浦、是則非靈神之征伐、觀音之加護哉、向後梟患之輩永絶、顕天下安穩泰平之条、不可有疑歟、望請官裁、且任先例、且准傍例、依院宣并国司領状、当国天満宮并国分寺以下可令造営之由、被下宣旨者、弥仰政道之貴、将致公家・武家御祈禱之忠勤者、権中納言藤原朝臣資宣、奉勅、依請者、府宜承知、依宣行之、

建治元年十二月三日

大史小槻宿禰（在判）

右少弁平朝臣（御判）

②建治二年（一二七六）正月付大宰府序下文（薩摩国天満宮古文書写、薩藩旧記前編卷七。新修国分寺の研究第六卷。鎌倉遺文にも一二二一二号として掲載）◆

下 薩摩国雜掌

可早任 宣旨状、令当国造進 天満宮并国分寺事

右、去年十二月三日 宣旨今年正月廿二日到来、応令管薩摩国造進天満宮并国分寺事、右、得彼宮〔寺、脱〕所

司等去〔五〕遺文〕月日奏狀僞、……所奉敬天滿天神者觀音御化身、大聖觀世音又大自在天神御本体也、然者云天滿宮、云国分寺、不可不被造営歟、就中蒙古凶賊等来着于鎮西雖令致合戰、**神風**荒吹、異賊失命、乗船或沈海底、或寄江浦、是則非靈神之征伐、觀音之加護哉、向後梟惡之輩永絶、顯天下安穩泰平之条、不可有疑歟、望請官裁、且任先例、且准傍例、依院宣并国司領狀、当国天滿宮并国分寺以下可令造営之由、被下宣旨者、弥仰政道之貴、將致公家・武家御祈禱之忠勤者、權中納言藤原資宣宣、奉 勅、依請者、府宜承知、依宣行之者、早任宣旨之狀、可令造進 天滿宮并国分寺狀、所仰如件、

建治二年正月 日

執行藤原朝臣

權大監大中臣朝臣（在判）

（以下一九名、省略）

・弘安二年（一二七九）十月の日蓮「瀧泉寺申狀（正しくは陳狀）」（昭和定本日蓮遺文全集）

聖人在国、日本国之大喜、蒙古国之大憂也、駢催諸龍、敵舟沈海、仰付梵釈召取蒙王、

③日向『金綱集』第十二・雜錄（『金沢文庫研究』第三二一号による） ◆

異賊襲我國事

（中略）

同（文永）十一年十月……廿日（辰尅）、少郷入道覚恵……菊池次郎、九国御家人等馳集令合戦之間、兩方死輩不知其数、及酉尅九国軍兵引退処入夜三百余騎ノ軍兵出来、白弴（鉾力）梅 暗空（ニアリ）、仍蒙古人同廿一日（卯尅）、悉退散畢、……同廿一日、住吉第三神殿（ヨリ）鐸ノ声シテ西ヲ指シテ行、
有人夢見、北野天神御歌

神風仁蒙古賀船和散波多々^{常載} 底之花久津登成曾宇礼志幾^{ミ載}

④安房妙法寺本『雜錄』（『金沢文庫研究』第三一一号）◆

蒙古国（并）新羅国高麗百濟賊来事

（中略）

第九十代

一 今上御時（龜山天皇）、筑前国博多箱崎賊来事、

国王十一代間、他国ヨリ我朝賊来事十八度、其内蒙古人八十度、或人夢見、北野天神御歌、

神風ニモウコノ船ハチリハテ、ソコノミクツトナルソウレ。キ、住吉第三神殿ヨリ鎗ノ声ノ西ヲサシテ行

ヌ、是即凡夫ノ力ニ非ス、仏神御助ナリト云、白鎗ハ八幡大菩薩^シ宇佐、梅鎗ハ北野天神安樂寺と云々、

・乾元二年（一三〇三）四月付肥前河上社座主弁髪解状（肥前河上神社文書。鎌倉遺文二二四七〇号）

文永弘安之今者、施風雨之神変而摧幾多之賊船於波濤、

・元亨元年（一三二一）七月付薩摩国天満宮・国分寺所司神官等申状（薩摩国天満宮古文書写、薩藩旧記前編卷七。

新修国分寺の研究第六卷。鎌倉遺文にも二七八一九号として掲載）

薩摩国 天満宮・国分寺所司神官等謹解 申進申□□（文事カ）

請殊早被経御 奏聞、且任先例、且依興行御徳政法、被造□（畢カ）当宮并国分寺堂塔等、弥耀 神威、奉祈

天長地久□（御）願子細状

副進

一通 宣旨（建治元年十二月□（三）日可造當当寺社由事）

(中略)

一通 大府宣(建治二年正月日当寺社造當事)

(中略)

此外雖多、數通 上宣等、且備進之、

一、天満宮并国分寺往古子細當時次第事

右、謹考旧規、当 宮者 天満大自在天神垂跡之地也、天曆皇朝被下官符〔符〕、号分補 安樂寺、……是則天下無双之御廟、国中第一之大社故也、就中、異国御祈禱事致精誠可勤行之由、就被下 度々 院宣於安樂寺、云当社、云安樂寺、雖異名異依、為一体分身之靈神、当社祠官等抽無^二一^一丹誠依奉祈禱、去文永年中蒙古凶賊等雖令襲来鎮西、依不堪神戰、或捨乘船沈海底、希令存命、雖有凶賊之、終不遂合戰之本意、空逃歸畢、……(この間に弘安の役の記事あり。次項に掲載)……、此等子細見聞之輩、莫不貴御廟之威德、爰当宮并国分寺当〔ママ〕塔等者、自往昔為国衙之所役、加修理、小破及大破之時者令造替之条、先例炳焉也、……幸今如承及者、可被興行諸国々分寺等之由、被行御徳政旨風聞、是則 天満大自在天神并大聖觀世音菩薩御威光、新 朝家安穩御祈禱令成就故也、望請恩裁、早被経 御奏聞、且依先例、且任興行法、当 宮并国分寺以下堂塔等、任損色注文旨、被造畢、日祀月祭之勤、式日無懈怠、弥振 神威、吾朝鎮護之□不愆、異国自歸皇化、三韓貢獻跡無絶、仍勒在状、以解、

元亨元年七月

執行貫首大藏

都維那大法師澄範

寺主大法師 嚴種

(以下、略)

・『西大勅諭興正菩薩行実年譜』文永十一年条（西大寺叡尊伝記集成）

自西国注進曰、十一月五日亥刻、猛風頻吹、蒙古大船一百余艘沈没海中、即奏其事、天顔大悦、延請菩薩、以加優償、

・『統史愚抄』文永十一年十月二十日条（新訂増補国史大系）

異国兵船二百余艘忽漂没、其余悉逃亡、……非人間所覃、神明化現歟、……（二代要記・長者補任・歴代最要・或記・歴代編年・如是院年代）、

・『歴代皇記』文永十一年条（改定史籍集覧）

十月廿日、……賊船二百余艘漂倒、神威力云々、

・『二代要記』文永十一年条（改定史籍集覧）

同（十月）始合戦、……爰同日亥刻許、兵船二艘出来、暗天合戦、非凡慮之所及、測知は神明之化儀也、即異国軍兵退散、

・嘉吉二年（一四四二）五月付筥崎社神官供僧等申状（筥崎宮文書）

去文永弘安兩度異賊襲来之時、……被致種々祈請、殊被專当社御造替祈念、依之或討捕数輩凶徒、或大風簸異賊之船、白浪曝異敵之骸、

⑤『歴代鎮西要略』三（『伏敵編』引用）◆

文永十一年……十月廿日、合戦於筑前赤坂、防戦数回云々、……十一月（ママ）廿一日、異賊之艨艟、為我神

風、端兵所敗而渤海殲兮、大將軍僅免而退、

・『馭戎慨言』下之卷（本居宣長全集）

さて同じき（文永）十一年十月五日に、蒙古の船おほくむらがり来て、対馬の浅茅が浦につきて、あたなふ、……同十九日の夜、筑前国までせめ来つるを、あくる廿日の日、筑紫のもの、ふどもおほく出て戦ひけるにぞ、あたの軍みだれて退きぬる、をりしも霜月廿一日の夜、雨風いみしくおこりて、其船どもあまたやぶれぬるは、もはら皇神たちの御守り也けり、一代要記には、……

以下には、「文永の役」の記事が有るにもかかわらず、「暴風（大風）」の類の記載が無い史料の名称のみを、概ね成立の年代順に掲載しておく。（ ）内の典拠は、一部の史料のみにとどめた。

『吉統記』文永十一年十月二十七日条

文永十一年十一月一日付関東御教書案（東寺百合文書、鎌倉遺文二一七四一号）

文永十一年十一月一日付関東御教書案（大友文書、鎌倉遺文二一七四二号）

文永十一年十一月三日付関東御教書（毛利家文書、鎌倉遺文二一七四三号）

『竹崎季長絵詞』上（日本絵巻大成）

『金剛仏子觀尊感身学正記』文永十一年条

延慶二年六月日付肥前武雄社大宮司藤原国門申状案（肥前武雄神社文書、鎌倉遺文三三七二一号）

『八幡愚童訓』甲本（日本思想大系）

『太平記』卷三十九（日本古典文学大系）

『保暦間記』文永十一年十月五日条

『増鏡』あすか川（日本古典文学大系）

『諏訪大明神絵詞』上（続群書類従）

『菊池武朝申状』（群書類従）

『神明鏡』下

『関東評定伝』（群書類従）

『鎌倉年代記』裏書（増補続史料大成。続群書類従本『北条九代記』下も同文）

『帝王編年記』文永十一年十一月六日条

『善隣国宝記』卷上・文永十一年甲戌条

『皇年代略記』文永十一年条

『日蓮聖人註画讃』卷五（続々日本絵巻大成）

『如是院年代記』文永十一年十月二十日条

『東寺長者補任』卷三・文永十一年条

『興福寺略年代記』（続群書類従）

『続本朝通鑑』文永十一年十月条

『大日本史』本紀・文永十一年十月二十日条

『北肥戦誌』一・七

『武雄社本紀』（『伏敵編』引用）

『国史略』卷三

『日本外史』源氏後記北条氏

『日本政記』卷十一

『対馬旧記』（『古事類苑』外交部引用）

『宗家譜』（『螢蠅抄』引用。年代を「弘安元年」に誤る）

『菊池家譜』（『螢蠅抄』引用）

『武藤少式系図』（『螢蠅抄』引用）

『室左近将監親善申状』（『螢蠅抄』引用）

『五檀法記』（『螢蠅抄』引用）

『弘安記』（『螢蠅抄』引用。同書は「偽作」とする）

二、弘安合戦と「大風」・「暴風」（「神風」）

前項と同様の基本方針のもと、本項では、弘安合戦に際しての「大風（暴風）」に関する史料の該当記事を成立年代順に掲載する。なお、文脈上、厳密には文永・弘安両度の合戦に即していない記述も、この項に配列した。

・『壬生官務家日記抄』弘安四年（二二八二）閏七月十一日条（元寇史料集の複製本）

異国賊船去一日夜、逢大風大略漂没、破損船済々、被打寄之由、鎮西飛脚一昨日歟到来之間、上下大慶之由、

謳歌者也、

・『勘仲記』弘安四年閏七月十四日条（史料纂集）

自宰府飛脚到来、去朔日大風動波、賊船多漂没云々、……今度事神鑑炳焉之至也、天下之大慶何事可過之乎、匪直也事也、雖末代猶無止也、弥可尊崇神明・仏陀者歟、

・『異国襲来祈祷注録』（『伏敵編』引用）

弘安四年……、注進状云、神託畢（亥半）、俄自東方雷電起、大風吹、大雨降如車軸、波浪如山立上二十余丈、数万船中振動漂溺、其数万船、破損摧失成寸尺、処々散在、遺賊滅亡者子刻、船之破損者丑時也、（弘安四年七月九日注進）、

・弘安四年閏七月十七日付宣旨（勘仲記同日条、鎌倉遺文一四四〇〇号）

去夏以降、蒙古襲来、……雖驚九州官軍、今月朔日暴風上波、是則神鑒之庇護也、賊船定漂没歟、

・弘安四年十月二十二日付日蓮書状（日蓮上人遺文、鎌倉遺文一四四九一号）

去後七月十五日御消息、同二十比到来、……去後七月御状之内云、鎮西には大風吹候て、浦々島々破損船充滿之間、……云云、……秋風に纔水敵船賊船なんとの破損仕て候を……、

・『神宮欄宜等注進状』（宮地直一『神道史』中による）

二宮末社風杜宝殿鳴動自二十七日及三ヶ日、今二十九日暁天自神殿發出赤雲一陣、而且西方忽起大風、而倒喬木矣、蓋九州異狄今明日之間歟、仍以言上如件、

・『通海大神宮參詣記』（続群書類従）

去ル弘安四年六月、……通海（法、脱力）印又院宣ヲ承テ、……風宮神ニ祈請シ申ケル、閏七月一日、巽方ノ

風、俄ニ発テ海上ニ鳴動シ、靈光嚇奔トシテ、異賊忽ニ漂没ノ間、通海法印、当宮ノ冥助ト存シテ、……去弘安四年夏ノ比、……御祈ヲ承テ、神宮ニ参シテ、鎮ニ懇祈ヲ抽テ、敵国ヲ降伏ノ処ニ、飛簾風ヲ起シテ、賊船忽ニ漂泊シ、陽侯浪ヲアケテ、群兵速ニ退散ス、

・『金剛仏子觀尊感身学正記』弘安四年条（西大寺觀尊伝記集成）

（七月）廿六日、三百余人参八幡宮、亥時発願、……潤七月一日、南北二京僧五百六十余人、集会宝前、一味和合勤行、觀尊説戒、々々終乍恐迷懷、即以平城御宇御託宣、訴申戎難、於大菩薩、以東風、吹送兵船於本国、不損来人、焼失所乘之船御云云、即不久大風吹出、雷鳴声発、向西而去、存神諾歟、

・正応六年（一二九三）三月二十八日付太政官牒（紀伊興山寺文書、鎌倉遺文一八一三四号。「正応六年太政官牒」の名で続群書類従にも収載）

弘安四年……七月廿九日暴風俄起、異国賊船一時滅亡、海内静謐、都鄙開眉、兼日之靈託、指掌乎符合、

・延慶二年（一三〇九）六月日付肥前武雄社大宮司藤原国門申状案（肥前武雄神社文書、鎌倉遺文二三七二一号。傍訓・返り点等は省く）

弘安亦七月廿九日〔午時〕、紫旗三流〔出一傍書〕自上宮、懸纛青天上、飛行賊船方之間、縹素驚目、尊卑合掌畢、其時大風吹賊船、悉漂波、異国降伏之靈瑞、自御在世之昔、迄御垂跡之今、掲焉也、争無御帰敬哉、
〔是七〕、

・『八幡愚童訓』甲本（日本思想大系）

後七月九日ノ戊尅ニ、西国ノ早馬着テ申ス、去七月晦日ノ夜半ヨリ、乾ノ風唱立〔ヲビタ、シ〕吹、〔閏〕七月一日ハ、賊船悉漂湯〔蕩〕シテ海ニ沈ヌ、……トゾ馳申ス、……異賊ヲ亡シ日本ヲ助給フハ、大菩薩守り坐

ス故ニ、風ヲ吹セテ敵ヲ摧キ、数万ノ賊徒悉片時ノ程ニ失シハ、致神威所ニテ、人力曾不煩、……我神ノ徳風遠仰テ、国家ノ人民煩ハズ、神功皇后ハ海水ヲ上ゲ、文永ニハ猛火ヲ出シ、弘安ニハ大風ヲ吹ス、水火風ノ三災、劫末ナラネド出来テ、任神慮自在也、

⑥元亨元年（一三二一）七月付薩摩国天満宮・国分寺所司神官等申状（薩摩国天満宮古文書写、薩藩旧記前編卷七。

新修国分寺の研究第六卷。鎌倉遺文にも二七八一九号として掲載。以下には、前項で掲載した同一文書のうち省略した箇所のみを掲載する）◆

其後又可致懇懃御祈祷之由、依被成下関東御教書於当社、令致丁寧御祈祷之处、去弘安四年凶徒等令来着之刻、令对治事非神慮之征伐者、更難及人力之□、諸人仰天之处、同年七月一日神風荒吹、賊船漂役〔没〕、賊徒一時滅亡、是則 天満大自在天神御征伐也、

・『元亨釈書』卷八・無学祖元伝（新訂増補国史大系）

〔弘安〕四年……春夏之間博多擾騒、而一風纔起、万艦掃蕩、願公不為慮也、果海虜百万寇鎮西、風浪俄来、一時破没、

・『西大勅諭興正菩薩行実年譜』弘安四年条（西大寺叡尊伝記集成）

又率比丘僧八百余員、至城州男山八幡宮、自（七月）廿五日、至閏七月一日、限七日期、毎日二時、開八百座仁王会、夜分修愛染不動等七壇護摩秘法、……閏七月朔、当期満日、山嶽震動、殿扉自開八字、……俄而猛風大起、電碎雷奔大雨傾河、於是在会縊素、争嘆未曾有、当是時、西海浪騰二十余丈、丘（兵力）船数万一時湮没、

・『神皇正統記』（日本古典文学大系）

辛巳ノ年（弘安四年ナリ）蒙古ノ軍オホク船ヲソロヘテ我国ヲ侵ス、筑紫ニテ大ニ合戦アリ、神明、威ヲアラハシ形ヲ現ジテフセガレケリ、大風ニワカニオコリテ数十万艘ノ賊船ミナ漂倒破滅シヌ、末世トイヘドモ神明ノ威徳不可思議ナリ、誓約ノカハラザルコトコレニテヲシハカルベシ、

・『保曆間記』 弘安四年閏七月一日条（群書類従）

蒙古数千艘ノ船ニ乗テ寄来ル、大風吹テ舟悉ク破損ス、本朝ノ諸神顯テ御合戦有ケルトカヤ、目出度カリシ事也、

⑦『増鏡』老のなみ（日本古典文学大系）◆

弘安も四年になりぬ、……七月一日、おびた、しき大風吹て、異国の船六万艘、つは物乗りて筑紫へよりたる、みな吹破られぬれば、或は水に沈み、をのづから残れるも、泣く泣く本国へ歸りにけり、石清水社にて大般若供養のいみじかりける刻限に、晴れたる空に黒雲一村にはかに見えてたなびく、かの雲の中より、白羽にてはぎたる鎬矢の大なる、西をさして飛び出でて、鳴る音おびた、しかりければ、かしこには、大風吹くるとつは物の耳には聞こえて、浪荒だち海の上あさましくなりて、みな沈みにけるとぞ、なを我国に神をはします事、あらたに侍けるにこそ、さて為氏大納言、伊勢の勅使のぼるみち、申をくりける、

勅として祈るしるしの神風によせくる浪はかつくだけつ、

・『諏訪大明神絵詞』上（続群書類従）

同六月廿五日、悪風俄吹来て、彼兵舟或な反復し或は破裂して、軍兵皆沈没す、適々船具料板ちるに取付て浮び出る輩は、釘かすがいにつらぬかれて、白刃赤肉を切にことならず、……凡我朝は神国也、濫季なりと云へども、神反の不思議言詞も翰墨も及びがたし、（年月日は問題がある）

・『太平記』卷三十九（日本古典文学大系）

弘安四年……八月十七日……兵已ニ渡中（トナカ）ヲサシ、時、サシモ風止ミ雲閑ナリツル天氣俄ニ替テ、黒雲一村良ノ方ヨリ立覆フトゾ見ヘシ、風烈ク吹テ波浪天ニ漲リ、雷鳴霆（ハタメイ）テ電光地ニ激烈ス、大山モ忽ニ崩レ、高天モ地ニ落ルカトヲビタ、シ、異賊七万余艘ノ兵船共或ハ荒磯ノ岩ニ当テ、微塵ニ打碎カレ、或ハ逆波浪ニ打返サレテ、一人モ不残失ニケリ、斯リケレ共、万將軍一人ハ大風ニモ放タレズ、

・『神明鏡』下（統群書類従）

弘安四年七月七日、皇太神宮ノ欄宜荒木田尚良、豊受太神宮ノ欄宜度会ノ貞員等、十二人起請シテ、連署ヲ捧テ上奏シケルハ、ニノ宮末社風ノ杜宝殿鳴動シテ、六日ノ曉天ニ神殿ヨリ赤雲一村立出、天耀其光中夜又羅刹如ナル鬼神顕出、玉囊ノ結緒解キ、大風口ヨリ出テ、沙漠ヲ揚、大木ヲ吹抜ク、測知ヌ異敵等此ノ日即滅亡無疑、……異敵九州ヲハ我住ニシテ、此日七万余艘ノ艤艦已ニ中国押渡ケルニ、天氣俄ニ替テ黒雲一村東ノ空ニ立覆ト見ヘシカ、悪風浪ヲ卷、雷電地ニ鳴炮シテ、七万余艘ノ兵船木葉ノ嵐ニ散カ如、天揚地覆、岸ニ当リ浪ニ溺、三百七十万騎ノ兵共一時ニ海底藻屑ト成ニケリ、……神国ノ奇特、殊ニ此時顕タリト申モ疎也、

・『鎌倉年代記』裏書（増補統史料大成。統群書類従本『北条九代記』下も同文）

今年（弘安四）七月、……同卅日夜、閏七月一日大風、賊船悉漂到、死者不知幾千万、

・『伊予三島縁起』（統群書類従）

弘安四年、……請思田坊之大徳、初一七日、於八幡宮拜殿、偏被異国調伏、閏七月二日午時畢程、日中御結願、大風雷電、万余艘、鎮西博多澳寄来、日本無勢神力非今可向不見、東大風雷電襲来、黒雲海上弥布、海水天上、其日子尅、数万艘敵船、無量軍兵、一夜内失、

・『金玉要集』異国蒙古人滅給事（長沼賢海『日本文化史の研究』による）

過ニシ弘安四年……上人（思円上人）定ヨリ出デ、……壬七月一日、異国怨敵万余艘、鎮西ハカタノ奥マテ寄セ来レリ、日本無勢ナリケレバ、神力ニ非ヨリハ、今ハサテト思合ケルニ、俄ニ東大風雷電ヲビタ、シク来、黒雲海上ニ弥布シテ、海水ヲ天ニ上ケレハ、其日ノ夜子尅ニ数千艘ノ敵船無量軍兵、一夜之内ニ失ニケリ、

・『予章記』（群書類従）

後宇多院ノ御宇弘安四年蒙古襲来ス、……夜半程ニ折節大風吹テ、三韓ノ船共悉吹被帰、大半破損シ浪ニ漂アリ、島陰吹寄、船ニ生残リタル者ハ降ヲ乞ドモ不赦、皆被殺ケリ、委ハ愚童訓ニ見エタリ、……

・『塩囊抄』（伏敵編）

当寺（北山観勝寺）ノ思円上人モ蒙勅定、男山八幡宮ニ参籠シテ秘法ヲ行ヒ給ケリ、……七月一日悪風、賊船悉漂蕩シテ、凶徒皆海ニ沈ム云々、

・『善隣国宝記』卷上・弘安四年辛巳条

※元亨釈書・神皇正統記・元史の引用につき、掲載は省略。

⑧『度会元長神祇百首自注』（群書類従所収『詠太神宮二所神祇百首和歌』）◆

神祇

神風ヤ級長戸彦ノ昔ヨリ 四方ノ夷モ治ニケリ

人皇九十代帝後宇多之御時、弘安四年之夏、……為降伏太神宮へ勅使ヲ被遣、其旨啓白之处ニ、飛廉風発テ海上鳴動シ、神威ヲ顕シ、形ヲ現シ、光ヲ放シ、阳（陽）侯波ヲ上シカバ、異賊忽ニ退散ス、是則別宮風宮之神、科長津彦命行向ヒ玉フニヤ、神風ト云義モ侍也、

・『天台座主記』第八十九世公豪・弘安四年条（増補天台座主記）

閏七月一日、大風吹起、賊船一時破滅、凶賊不残沈海底、免逆帰本国者漸三人云云、

・『統史愚抄』弘安四年閏七月十四日条（新訂増補国史大系）

太宰府駅奏、去一日大風動逆浪、蒙古兵船六万余艘忽漂没、

・『一代要記』弘安四年条（改定史籍集覧）

同（閏七月）九日宰府飛脚到来云云、朔日大風頓吹、而異国兵船悉以漂没了、是併神明之靈威、非人力之所及云云、

・『関東評定伝』（群書類従）

弘安四年辛巳七月、……同卅日夜翌日閏七月一日大風、賊船悉漂洲、破壊海陸之間、

・『歴代皇記』弘安四年条（改定史籍集覧）

後七月二日大風俄吹、賊船一時破滅云々、十四日鎮西飛脚到来、申右子細、法驗嚴重云々、

・『皇年代略記』弘安四年条（群書類従）

閏七一大風俄吹、賊船一時破滅、

⑨『百合若大臣』（新日本古典文学大系）

此度の不思議には、む国の蒙古（むくり）が蜂起して、四万艘の船どもに、多くの蒙古取り乗り、りやうさうとくわすい、飛ぶ雲と走る雲、彼四人が大将にて、筑紫の博多に船を寄せ、攻め入ところ聞えけれ。……そも我朝と申は、国は粟散辺土にて、小さしと申せ共、……代々の御代に、異国より九夷興つて欺け共、神国たるによりつゝ、亡国となす事もなし。……

其中にとつても、内侍所の御託宣は、かたじけなふぞ聞えける。……「蒙古が向かふ日よりして、天下の神達、高天原に集会して、軍評定とりくも也。しかりとは申せ共、蒙古が大將りやうさうが諸庁に放つ毒の矢が、住吉の召されたる神馬の足に立。此傷癒さんそのために、神の戦を延べられたり。これによつて九夷ども、力を得たりと攻め入るなり。されども、彼らが振舞は、風吹かぬ間の花成べし。急ぎこの度凡夫の戦を早めよ。神も向かはせ給ふべし。凡夫の戦の大將には、左大臣が嫡男に百合若大臣を向くべきなり。……」と神託有て、神は上がらせ給ひけり。……

都を立て其日は、……王城の鎮守を始め奉り、衣冠を脱ぎ替へ鎧を召し、清麗微細の色の上には、夜叉羅神の形を現じ、雲に乗り、霞に乗り、一つは国家を守らんため、又は氏子を守護せん為、我氏子わが氏子、形に影の添ふごとく、先に立てぞ守らる。さて神たちの議によりて、神風涼しく吹ければ、筑紫に陣取る蒙古共、この由を承て、「今度はまづく引けや」とて、四万艘に取り乗て、蒙古国へぞ引きにける。さてこそ天下も穏やかに、国も目出度おはしけれ。……

……筑紫へ勢をぞ越されける。大臣殿も吉日を選び、御出でとこそ聞えけれ。……さて船どもの艫舳には、五色の幣をはぎたてて、神風涼しく吹きければ、魔縁魔界も恐るべし。昔の譬へを引くときは、神功皇后の新羅を攻めさせ給ひし時、神集めして向かはれしも、かくやと思ひ知られたり。（百合若大臣の奮戦。一旦霧に遮られたが、「神の力」を仰ぎ、「伊勢の国荻吹く風」「住吉の松吹く風」にたちまち霧が消える）四万艘に取り乗たる蒙古、多く討たれて、僅か一万艘になる。さのみは罪になるべしとて起請を書せ助け置き、本地へ戻させ給ひて、日本は戦に勝ちぬとて、八万艘の船内の喜び合ふ事限りなし。

蒙古高麗之戦艦過赤間関、俄而大風起、逆浪卷沙、而鑑悉破碎、蒙古人高麗人皆溺死、

⑩『異称日本伝』卷上三（新註皇学叢書）◆

今按、元世祖以彊胡種、奮三世之余烈、并吞中国、囊括四海、乘勢欲取我神国、然惟此一事終世不能、徒非不能而已、沈溺十万人、盜賊相繼而起、民不夕生、故終罷擊日本、於是天下後世、知我朝天險神威不可犯、日本豈不盛哉、彼擊我国、取道高麗、……而不能合兵登岸、可憐神風一陣、破滅矣、

・『大日本史』本紀・弘安四年閏七月条

甲子朔、……是日大風、有黑雲覆石清水宮、有白羽鳴鐘、出宮西去、……十四日丁丑、太宰府駁奏、本月朔、大風、元軍艦悉没於肥前鷹島」

・『武雄社本紀』（『伏敵編』引用）

弘安四年……八月（ママ）一日、大風鼓海、洪浪踏天、賊船漂没、生還者譏三人、

・『歷代鎮西要略』三（『広文庫』の引用による）

弘安四年八月朔日（或曰閏七月朔日）、暴風大扇洪波滔天、煙飛雲不斂、雷雨如暗夜、蒙古之幢牒数千艘、為風波洲石破碎、賊徒委溺死、生得婦者、于閭万五等、僅三四人耳、我兵不血刃、而鑒蒙古数十万、是信我朝威神之靈驗也云々（或記曰、弘安四年辛巳、蒙古来著対馬島、遭大風恐ク亡ブト云々）、世謂、牟久利故久利是也、

⑪『阿蘇家伝』（『伏敵編』引用）◆

弘安（後宇多天皇）四年閏七月……時ニ神風大ニ起リ、賊船悉ク破損、……是皆阿蘇明神ノ靈德也、

⑫『日蓮親書旗漫荼羅記』（『伏敵編』引用）◆

弘安四年辛巳、……則日本之靈神擁護、有神風吹彼賊船、其人数等不残破、異国追払給、

⑬『参考蒙古入寇記』卷之四（『蒙古襲来研究史論』の引用によるが、目録のみで、本文未確認）◆

一 夷賊降伏御祈之事、附神風破賊船、

・『都名所図会』卷之五「藤杜のやしろ」項（ちくま学芸文庫）

例祭は五月五日にして、産子は武具を着して走り馬することは、光仁帝の御宇天応元年に異国の蒙古、日本へ攻め来るよし聞こえければ、天皇第二の皇子早良親王を大將軍として退治あるべきよし宣旨を賜る。親王、当社に祈誓して五月五日に出陣したまふ。神威いぢるしく、たちまち暴風おほいに吹き来り、蒙古の軍船浪にただよひ悉く亡びうせけり。この吉例によりて毎歳軍陣の行粧をなし、天下平安の禱りとしたまふ。

・『馭戎慨言』下之卷（本居宣長全集）

さて弘安四年六月、蒙古のあたどもおびた、しくおしよせ来つ、……閏七月朔日、天皇神祇官に行幸ましまし、中御門大納言経任卿を勅使として、發遣せられ此事を大神宮に祈り申給ひ、又国々の社々にも、御いのり共有けるに、そのしるしの御さとし共おほかりける中にも、伊勢の風宮の神の御さとしなど、いちじるしかりしに、すなはちその閏七月朔日の日の午の時ばかり、あからしま風おこりて、あたる船三千五百艘、たちまち浪にたゞよひ、うちやぶられて、おぼれ死き、元史に、……といへる、此時の事也、……さてかく俄にはげしき風のおこりて、たやすくあたる軍のほろびうせぬるは、世にも語り伝ふごとく、まことに皇神たちの御力也、……

・『天地根元歴代図』（『蜚蠊抄』引用）

弘安三年五月、異国ヨリ凶賊襲来、七月晦日大風雨、賊船一千七百余艘悉漂没、蒙古トモ多被虜、（按、三年

当作四年、

⑭『蚩蠅抄』序（新註皇学叢書）◆

なづけて蚩蠅抄といふ、こは蚩火のかゝやく神、五月蠅なすあしき神のあらびにて、えみしらの此国にあだすることありとも、やがて神風に吹やぶられて、遂にうれひなからむ理りを、世人にしらせむとてなむ、

⑮『玉たすき』二之卷（平田篤胤全集）◆

弘安四年正月に、蒙古襲来の事あり、此の時時宗執権にて、前に云へる如く、奸悪なる男には有りしかど、此の事に於ては、能く計らひてぞ有りける。此は師の馭戎慨言に、委曲に記し置れたれば、今更に云はず、（なほ此の時の喧ぎ、かつ其賊の軍船を、神軍の神風にて吹きくづし、鑿にしたる趣など、今の世の書等に、委く見えたるを、塙保己一檢校が、拾ひ抄さしめて、蚩蠅抄と号けし物の有るを見るべし、……）、

・『国史略』卷三・弘安四年七月条

閏月朔、大風有黒雲、覆石清水宮、有白羽、鳴鏑出宮而西去（増鏡）、虜艦為颶風敗壞、……（愚童訓）、

・『日本外史』源氏後記北条氏・弘安四年七月条（『邦文日本外史』）

閏月大風雷あり、虜艦敗壞す、……伏屍海を蔽ひ、海、歩みて行くべし、虜兵十万脱れ帰る者、纔に三人と云ふ、

・『日本政記』卷十一（日本思想大系）

（弘安）四年……秋閏七月、大風起る、虜艦敗れ、虜、争ひて陸に上る、我が兵、撃ちてこれを殲（つく）す、

三、その他の「神風」史料―鎌倉遺文より―

この項では、さらに、文永・弘安両合戦のいずれの文脈とも直接関わるものではないが、両合戦から間もない時期の「神風」表記のある史料を掲載する。

⑩正応六年（一二九三）三月二十二日付伏見天皇祭文（門葉記抄、鎌倉遺文一八二三号）◆

本尊界会熾盛光仏頂大曼荼羅……夫熾盛光法者、答明王之願、以必令護持、却異賊之侵乱、以立令降伏、転禍為福之勝利矣……仰願、熾盛光仏頂大曼陀羅各任本誓、宜納单誠、内則照仏日の浄光矣、緬尋法流於唐朝之濫觴、外亦振神風之赫威焉、再払奸霧於晋羊之凶器、我国為神国有盟、此界与仏界有縁、遞合神力仏力、宜治海内海外、

⑪（嘉元四年（一一三〇六）六月六日付聖濟書状（東大寺具書、鎌倉遺文二二六五六号）◆

（正和四年（一一三一一五）六月六日付聖濟請文（東大寺具書、鎌倉遺文二五五三三三号）◆

※上記2通は推定年代を異にし、かつ、わずかな文字の相違もあるが、原文書は同一の文書と判断し、1通として扱う。

来廿七日八幡宮遷幸、可參勤法会事、衆議之趣、謹奉候了、仏日再輝、神風復旧、匪啻本寺之光花、惣為国家之繁榮、誰不悦之（以上4文字、後者には無し）、誰不帰之哉、……得御意、可令披露衆中給候、恐々謹言、
六月六日
法印聖濟

四、「神風」用語使用の実態と考察

(一)

以上、なお管見に漏れた史料は（未公刊の史料も含めれば一層）少なくないと思われるが、一区切りとして、以上の二・三・四の各項にわたって提示してきた結果をまとめておきたい。

まず、文永合戦に関する記述の中で「神風」表記の有る史料は次の通りであるが、そのうち③～⑤は、弘安合戦以降に成立した史料であり、史料によっては両合戦の混同、あるいは後者の前者への影響等を考慮しなければならない可能性がある。

- ① 建治元年（一二七五）十二月三日付官宣旨
- ② 建治二年（一二七六）正月付大宰府序下文
- ③ 日向『金綱集』第十二・雑録
- ④ 安房妙法寺本『雑録』
- ⑤ 『歴代鎮西要略』三

次に弘安合戦に関する記述の中で「神風」表記の有る史料は左記のようである（⑨の取り扱いについては後述する）。

- ⑥ 元亨元年（一三二一）七月付薩摩国天満宮・国分寺所司神官等申状

⑦『増鏡』老のなみ

⑧『度会元長神祇百首自注』

⑨『百合若大臣』

⑩『異称日本伝』卷上三

⑪『阿蘇家伝』

⑫『日蓮親書旗漫荼羅記』

⑬『参考蒙古入寇記』卷之四

⑭『蛭蠅抄』序

⑮『玉たすき』二之卷

さらに、両合戦に直接関わる文脈上ではないが、逸することのできない「神風」史料としては次のようなものがある。いずれも文永・弘安両合戦からあまり遠くない時期のものである。

⑯正応六年（一二九三）三月二十二日付伏見天皇祭文

⑰嘉元四年（一三〇六）または正和四年（一二三二）六月六日付聖濟書状（請文）

以上の諸史料に対し、一方で、文永・弘安両合戦を通じ、合戦の記述は有っても「大風（暴風）」の類の記述の無い史料、また「大風（暴風）」の記述は有っても「神風」とは表記されていない史料は圧倒的に多く、一々はあげないが、『神皇正統記』や『八幡愚童訓』・『太平記』・『大日本史』、さては『日本外史』など、いわゆる「神国」思想の表明で著名な諸史料ですら、厳密には「神風」の表記が無いことは注意しなければならない。

もちろん、「神風」の表記は無くとも、「大風」の類の表記がある史料は、その多くが敵国退散祈願の寺社の祈禱の

結果、あるいは「神国」故の現象と語られてはいるのであるが、にもかかわらず「神風」表記はごくわずかにとどまるという落差があるのも事実である。したがって用語「神風」は、「神国」思想の高揚を背景とすることは否定できないが、「神国」思想の高揚がただちに用語「神風」の普及と並行していたわけではなく、両者は、一旦は切り離して考えるべきではなからうか。

以上に見て来たところから、冒頭に触れた「神風」用語の使用に関する、これまでの二つの見方は、両極端に過ぎるもので、上掲の史料上の所見には反していることが明らかであろう。

(二)

では逆に、数は多くないとはいえ、「神風」表記を含む史料の存在をどのように考えればいいのであろうか。上掲の①～⑮の諸史料を中世史料と近世成立の史料とに大別して、それぞれ年代順に（必要に応じては一括して）検討を加えてみよう。なお⑯と⑰は、関連史料として言及したい。

まず、順序は逆になるが、近世成立の諸史料⑤および⑩～⑮については、性格や成立年代等未詳のものもあり、かつ、中世とは異なる思想史の文脈をも考慮に入れる必要があるので、簡潔にコメントを付すにとどめて今後の精査を期したい。

⑤『歴代鎮西要略』は、佐賀藩において編纂された『歴代鎮西志』全三十五冊を要約して全十三巻にしたもの（国史大辞典による）。文化十三年（一八一〇）の序文が付された長村鑑『蒙古寇記』にも「鎮西要略」の名で度々引用されている。今回『伏敵編』より引用した文永合戦の記事に「神風」の語が見えるが、上記のように、『広文庫』よ

り引用した弘安合戦の記事には「神風」の語が使用されていない。

⑩の『異称日本伝』は、松下見林著。元禄元年（一六八八）の自序があり、同六年に刊行された。百数十種の漢籍に現われた日本関係記事を網羅的に収載したもので、引用箇所は、『元史』外夷伝高麗の条を引いた後に付された見林の評言である。

⑪の『阿蘇家伝』も、成立年代等未詳。『補訂版国書総目録』・『古典籍総合目録』には「阿蘇家伝抜書」が記載され、阿蘇惟馨（一七七三～一八二〇）の著作と見える。

⑫の『日蓮親書旗漫茶羅記』も『国書総目録』等に登載無く、未詳。ただし、後述する③・④との関連で注意すべきものがある。

⑬の『参考蒙古入寇記』は津田元貫（一七三四～一八一五）の著。序文によると宝暦八年（一七五八）の著作となるが、それには疑問もあるとされる（『蒙古襲来研究史論』）。

⑭の『蜚蠊抄』は、塙保己一の著作で、文化八年（一八一二）成立。外夷来襲の史料集で、百三十部の諸書からの抄録からなるが、特に文永・弘安両合戦の記事に重点が置かれている。

⑮の『玉たすき』は、平田篤胤の著。文化八年（一八一二）に成った著者自撰の『每朝神拝詞記』を解説したもので、出版は天保三年（一八三二）。著者の古道および国学に関する見解を詳しく知ることができる。

次に、中世に遡る①～④および⑥～⑨について検討を加える。

A. 薩摩国分寺・天満宮関係史料（①②⑥）

①・②・⑥の三点の文書は相互に深い関連がある（①と②は、ともに⑥の「副進」文書、いわゆる具書となっている）。本来ならば、それぞれの全文を掲げて検討すべきであるが、紙数の関係で、三点の文書の内容と相互関係を考

慮に入れた上での要点を述べるにとどめたい（⑥については、文永合戦の項における引用も参照のこと）。

今、「神風」の語句に注目して年代順に内容を整理してみると、以下の四段階に整理できよう。

I. 建治元年（一二七五）某月某日、薩摩国天満宮・国分寺（＝宮寺）所司が、大破に及んでいる殿舎の造営を朝廷に訴える。その中で、先の「神風」による異賊撃退は、祀るところの「天満天神」ならびに「大聖観世音」の加護であることを強調する。（①・②に引用する「奏状」）

II. 建治元年十二月三日、朝廷が、薩摩国天満宮・国分寺の造営を大宰府に命じる。（①）

III. 建治二年（一二七六）正月、大宰府が、薩摩国天満宮・国分寺の造営を薩摩国に命じる。（②）

IV. 元亨元年（一二三二）七月、薩摩国天満宮・国分寺所司神官等が、①・②ほか計二五通の具書を添えて、国分寺興行の徳政に任せ、堂舎を造畢せられんことを申請する。その際、当寺社領は博多津石築地役並びに警固役を免除されたこと、文永合戦では「神戦」に堪えずして蒙古軍は逃げ帰り、弘安合戦でも「神風」が吹き荒れて賊船が一時に滅亡したのは「天満大自在天神御征伐」であることを強調し、さらに建治元年の奏聞を経て、院宣によって料所六か所が寄付されたが、様々な妨げがあつて造営が停滞している事情を述べている。（⑥）

以上の経過から、一連の文書の文言をそのまま受け取れば、蒙古合戦に伴なう「神風」の語は、①・②に引用された建治元年の薩摩国天満宮・国分寺所司奏状（上記Ⅰの段階）が初出であり、かつ文面から見ても文永合戦について述べられたものということになる。

しかしながら、Ⅱ・Ⅲの段階を経て、①・②ほか多数の具書を添えて出された⑥（Ⅳの段階）において、文永合戦に関する記述には「神風」の語が見えず、かつ弘安合戦の方のみにしか「神風」の語が見えないのは不審無しとしな

い。

またⅠの段階の奏聞では「安楽寺別当法印并前菅宰相家拳状」を賜ったことを述べ、Ⅳの段階でも「就中、異国御祈禱事致精誠可勤行之由、就被下 度々 院宣於安楽寺、云当社、云安楽寺、雖異名異依、為一体分身之靈神、当社祠官等抽無二丹誠依奉祈禱」と述べて、筑前安楽寺との本末関係（通説では応和年間〔九六一―四〕に遡るといふ）を前提とした一体的関係を強調しているが、意外にも現太宰府天満宮には、天満宮安楽寺で異国降伏祈禱が行なわれたことを証する直接史料は見出されていない。同様に、薩摩国天満宮・安楽寺に関わる興行令・異国降伏祈禱を『対外関係史総合年表』に拾うと、

建治元年（一二七五）九月十四日、幕府、（九州各国の？）寺社に、守護を通じて異国降伏の祈禱を命じる。

弘安二年（一二七九）十二月二十八日、幕府、守護を通じて各国の寺社に異賊降伏の祈禱を命じる。

弘安七年（一二八四）五月二十日、幕府、新式目三八カ条を發布し、鎮西社領の返付、一宮・国分寺の興行、鎮

西名主職の安堵などを定める。

正応二年（一二八九）十二月一日、幕府、守護を通じて各国の寺社に異国降伏祈禱を行なわせる。

同年十二月二日、幕府、周防国・長門国・鎮西の守護をして、国内の主な寺社に、翌年十月まで異国降伏祈禱を行なうよう通達させる。

正応四年（一二九一）二月三日、幕府、諸国の国分寺・一宮以下の主要な寺社に異国降伏祈禱を行なわせ、毎月巻数を執進するよう守護に命じる。

正応五年（一二九二）十月五日、幕府、守護を通じて、諸国の一宮・国分寺以下の主要な寺社に異国降伏祈禱を命じ、巻数を提出させる。

同年十月二十七日、幕府、薩摩国の一宮・国分寺以下の主要寺社に、異国降伏祈禱を修して巻数を提出するよう、守護島津忠宗に命じる。

永仁六年（一二九八）十二月一日、幕府、九州の大社以下の修造が遅れ、恒例の仏神事がすたっているため、各
国中の院主らに守護を通じて興行を命じる。

正安二年（一三〇〇）七月十三日、幕府、西国の守護に、国中の寺社に命じて異国降伏祈禱を修させる。

嘉元元年（一三〇三）十二月十日、幕府、九州の主要寺社で異賊防禦祈禱に励むよう、鎮西探題に触れさせる。

延慶二年（一三〇九）二月二十六日、鎮西探題、九州の主要寺社に祈禱を行なわせ、長門守護、寺社の修理と祈禱を命じる。

延慶三年（一三一〇）二月二十九日、幕府、守護を通じて全国の寺社に異国降伏祈禱を命じる。

のようになり、すべて文永合戦以降で、かつ大半が弘安合戦以降の史実であることも注意しなければならないであろう。

以上を総合して、①・②（及び引用された奏状）をただちに偽文書と決めつけるにはなお躊躇されるものの、不審点も無いわけではないとして保留すると、現状では⑥が蒙古合戦の経過を踏まえた上での「神風」の初見であることが改めて確認され（もちろんその場合でも、「神風」の語が⑥の元亨元年に突如として出現したのではなく、遅くとも弘安合戦以降に次第に醸成されてきたものと考えられよう）、引いては、その「神風」の語の使用の背景に、薩摩国天満宮・国分寺（宮寺）所司の何らかの意図・主張を積極的に読み取るべきではないかと考えるものである。

さらに言えば、その主張の背景の、少なくとも一つと考えられる「天満宮」（および、その祭神「天満大自在天神」）との関係は、時期が相前後する次項Bの史料にも見られるのである。

B. 日蓮宗関係 (③④)

③『金綱集』の撰者日向(一二五三～一三三四)は、日蓮の本弟子(六老僧)の一人で、④は、『雜錄』所収文書中、同じく六老僧の一人日興(一二四六～一三三三)の談話を、弟子の日順(一二九四?)が類聚して私見を加えたものからの引用である。念のために付言すれば、④は永祿三年(一五六〇)日堯による写本である。

④の日興談話部分を基準にすると、両者の内容ほぼ骨子を同じくし、その原形は師の日蓮に求められ、かつ日蓮が『立正安国論』広本を作成し、門下に示した弘安元年(一二七八)頃のものと推定がある。それが事実ならば、弘安合戦以前の内容となる。

しかしながら上掲のように 文永合戦後も、弘安合戦後にも、日蓮書状中に「神風」の語は使われておらず、また何よりも③・④では、

神風仁 蒙古賀船和 散波多々幸殿

底之花久律登幸殿 成曾字礼志幾(以上③)

神風ニ モウコノ船ハ チリハテ、

ソコノミクツト ナルソウレシキ(以上④)

という、同一の「北野天神御歌」の中の語句であることに注目しなければならない。

所詮は菅公仮託歌にすぎない同歌の成立・仮託の時期等は、関連史料の文献学的検討も含め、今後の検討にゆだねるほかないが、さしあたりは、やはりAとの関連が一つの課題と言えよう。

ちなみに日興については、正和三年(一二三四)六月十八日付の日盛宛書状で、異国襲来の報を得て驚き、亡国の期到来かと歎いている事実があること(『対外関係史総合年表』)を付言しておきたい。

C. 伊勢神宮関係 (⑦⑧)

⑦の『増鏡』は、南北朝時代の歴史物語。著者は未詳だが、二条良基（一二二〇～一三八〇）七〇年頃の成立とされる。「あすか川」の巻の文永合戦の記述はごく短く、「大風」そのものの記載も無いが、「老のなみ」の巻の弘安合戦の記述では、異国船撃退の「大風」を石清水八幡宮における大般若経供養の効験との趣旨を記した後に、勅使として伊勢に下った時の藤原（御子左。二条家の祖）為氏（一二二二～一八六）の和歌を引用しており、その上句に「勅として祈るしるしの神風に」と見えている。

実際、伊勢神宮では、弘安三年（一二八〇）三月十七日に、西大寺叡尊が大蔵経を伊勢内外宮に献じ、また内宮・風宮に参つて異国の難を祈った事実があり、同四年（一二八一）の七月二十七～二十九日にわたって風宮の宝殿が鳴動したとの注進が両宮欄宜等よりあった（『対外関係史総合年表』）。こうした史実との関連が背景として考えられるとともに、蒙古合戦以前の「神風」の原義を色濃く反映したものとも考えられる。なお皇大神宮（内宮）の「風宮（風日祈宮）」が別宮となったのは正応六年（一二九三）のことである。

ただし藤原為氏が伊勢公卿勅使として派遣された史実は疑わしく（神道大系所収の『伊勢勅使部類記』には見えない）、史実としては、文永五年（一二二八）四月十三日参宮の花山院通雅、同八年十二月十六日派遣の洞院実守に続き、弘安四年閏七月二日に宸筆宣命を携えた権大納言藤原（中御門）経任が伊勢神宮に発遣され、同七日に参宮しているのみである（以上『対外関係史総合年表』）。また管見では、『増鏡』所収歌が、為氏・為世父子の和歌を後人が集めた『大納言為氏卿集（為氏集とも）』には見えておらず、この点にも注意する必要があるう。

さて、次の⑧の『度会元長神祇百首自注』は、度会元長（一二九二～一四八三生存）の作で、応仁二年（一四六八）に成立した。元長は、伊勢豊受大神宮（外宮）別宮高宮の御炊物忌を勤仕し、御炊大夫山田大路氏の祖となつた

人物で、本書は、内外宮をはじめとする神祇に関する自詠・自註の和歌百首を収録している。本書の場合も、蒙古退散の「神風」を「別宮風宮之神、科長津彦命行向ヒ玉フニヤ」と述べている。なお豊受大神宮（外宮）の別宮の一つ「風宮」が、やはり蒙古合戦の際の祈の功で別宮となったのは、皇大神宮（内宮）の別宮「風日祈宮」と同年の正応六年（一二九三）のことである。

D. 『百合若大臣』（⑨）

『百合若大臣』は、幸若舞の一曲で、嵯峨朝の左大臣きんみつの子の百合若（長谷寺観音の申し子）が蒙古追討を命じられ、三年間の苦戦の末に退治する前半の話に「神風」の語が登場している。

成立は室町末期頃としか言いようがなく、蒙古合戦のみならず応永二十六年（一四一九）のいわゆる「応永の外寇」も素材の一つとなっている点にも考慮が必要である。「神風」が二度あったかのように描かれているが、これらを文永・弘安両合戦のそれぞれに配当するのは難しく、かつ合戦の実際からは相当遠い記述であるとみられるので、ここに配した。

「神風」の登場する文脈では伊勢神宮や住吉神社の「風」も見えるが、全体としては「神たちの議」あるいは「六十余州の大小の神祇」の威力とされているとみてよいであろう。また記事中に「神の戦」と「凡夫の戦（『人間の戦』）」とが対語として用いられている点も注意しておきたい。

(二)

なお、上記①・②・⑥（すくなくとも⑥）が、全く孤立した史料ではないことは、これまでの検討から明らかと思

われるが、ここではさらに⑬・⑭の検討を通じて、その点を補説しておこう。

⑬は、正応六年（一二九三）の年、永仁に改元。三月二十二日に、青蓮院慈助法親王が、異国降伏のため内裏富小路殿で大熾盛光法を修した際の、伏見天皇の祭文である。

熾盛光法は、天変地異その他の災厄の時に、熾盛光仏頂如来を本尊として、一切の災害・厄難を除き、国家安泰を祈る密教の修法で、日本には円仁が唐から伝え、台密では山門四箇大法の第一として特に重んじられた。

この祭文は、熾盛光法の意義を踏まえた上で、「内則照仏日之淨光矣、……外亦振神風之赫威焉」わんことを仰ぎ願い（「仏日」は、仏の光が無明の闇を破ることを太陽に譬えている語）、「我国為神国有盟、此界与仏界有縁、遞合神力仏力、宜治海内海外」と述べている。これも、蒙古合戦（少なくとも弘安合戦）の経過を踏まえた「神風」用語の早い時期の使用例として注目される。

⑭は、年代未詳ながら、「仏日再輝、神風復旧」のごとく⑬と同趣の文言を含む。同史料は統群書類従本『東大寺具書』所収で、同書は全体として東寺と東大寺との本末関係の争いの中で、東寺側の提出した訴訟の陳状と見られるものである。⑭は、内容上、東大寺八幡宮遷宮に際しての法会参動に関わるものであるが、今後の精査に俟つべきものがある。また差出人の聖済についても、鎌倉時代中・後期の真言僧で、勧修寺の栄尊に伝法灌頂を受けたとされるほか、生歿年・経歴等未詳である。

以上の二点の史料を通じ、文永・弘安両合戦以降もなお外寇の脅威が続いていた時期に「神風」の語が使用されていた状況が判明し、同時に①・②ないし⑥が、「神風」の語の使用において全く孤立したものとは言えないことも示唆しているのである。

むすび―薩摩国天満宮・国分寺と「神風」、及び今後の課題について

以上で、ひとまず今回の作業を終える。単なる史料の羅列・提示に終始した感はないが、私見では、従来はこの程度の作業すら提示されずに漠然と「神風」が論じられて来たのであり、今回は、同時に「神風」の語が実際には使用されていない例も極力博搜を試みた点にも工夫を凝らしたつもりである。もとより、作業の性質上、史料提示の完璧は期しがたく、今後も今回の趣旨に沿った史料の収集が第一の課題となるが、「神風」表記の有る史料が多く漏れている事態は考え難いというのが現時点での見通しである。

第二に、今回の作業の結果、薩摩国天満宮・国分寺関係史料が、蒙古合戦の文脈上での「神風」の初見であることを強調したが、初見であること自体はすでに数人の先学の指摘がある一方、全く「孤立」した史料というだけで、これらを偽文書と決めつける意見もあった。

しかし今回の作業の結果、上記史料は全くの「孤立」とは言えず、また同時に「初見」であることの位置も、わずかながら従来よりは明らかにになったのではなからうか。それだけに、関連文書のより綿密な検討をはじめ、その初見の背景・意義を、薩摩国天満宮・国分寺の歴史と天神信仰の動向と相關的に探って行く作業が第二の課題となる。そもそも前記記念講演ならびに小稿作成の発端は、実にこの点への関心にあったことを、ここに告白しておきたい。

そして第三に、薩摩国天満宮・国分寺に限らず、上記に提示した「神風」の語の使用（同時に、使用されない場合も含めて）をめぐることは、次のような大きな視点からの検討が必要と思われる。以下、箇条書の覚書として小稿を締めくくりたいと思う。

a. 各史料の、成立年代・作者、またテキスト批判、さらには文脈・（地域性・時代性）背景、先行史料の引用ないし受容実態等の、より一層綿密な検討を進める。

b. 主として南北朝時代頃までの史料については、蒙古合戦の経過・推移、及び文永・弘安両合戦後の第三次襲来の脅威の中で、幕府による軍事力動員・異国警固等と公武による異国降伏祈祷、及び諸寺社の動向の実態の中で、それぞれの位相を探って行く必要がある。

c. 室町時代以降の諸史料については、蒙古合戦との時間的隔たりが次第に増して行く中で、歴史記述との関係や、時代の推移にも配慮しながら、様々な立場からの思想的考察が主たる目標になる。

d. 「神国」思想との関連で言えば、多くの史料の文脈に「神国」思想がある以上、用語「神風」の有無は問題ではないとする意見もあるかも知れないが、私は、そのような見方にはただちには与しない。「神国」思想の高揚・普及、さらには「神国」の語の意味変化等々の推移などからめた、より一層綿密な検討も必要である。

e. 蒙古合戦は、日本側に立てば、先に引用した幸若舞『百合若大臣』の文言に登場する「神の戦」（近年は「神々の戦い」と表現される）と「凡夫の戦」とが相俟ったものであった。合戦から時間的距離が増すにつれて、そのような理解・解釈が広まるようであるが、合戦の当事者の立場からすれば、両者は実は矛盾する場合もあったのではなからうか。「神の戦」の功能・靈験（合戦の経過から言えば、気象条件という偶然）の強調は、現実の武士たちの戦功の強調（論功行賞）とは、必ずしも一致しないと考えられるからである。こうした視点にも配慮すべきではないかと考えている。

【参考文献】

- 重野安繹監修・山田安榮編纂『伏敵編』（吉川半七、一八九二年訂正再版）
北野神社社務所編『北野誌』首巻・天（国学院大学出版部、一九〇九年）
長沼賢海『日本文化史の研究』（教育研究会、一九三七年）
相田二郎『蒙古襲来の研究』（吉川弘文館、一九五八年。一九八二年増補版）
宮地直一『神道史』中（理想社、一九五九年）
川添昭二『注解元寇防塁編年史料』（福岡市教育委員会、一九七二年）
筑紫 豊『元寇危言』（積文館、一九七二年）
竹内理三編纂『太宰府・太宰府天満宮史料』巻八（太宰府天満宮、一九七二年）
竹内理三『太宰府・太宰府天満宮史料』巻九（太宰府天満宮、一九七四年）
川添昭二『蒙古襲来研究史論』（雄山閣出版、一九七七年）
近藤喜博『伊勢神宮御正体―叙尊の参宮と蒙古調伏に関連して―』（民衆宗教史叢書『伊勢信仰Ⅰ』所収、一九八五年。一九五九年初出に加筆）
西高辻信貞監修『太宰府天満宮』（講談社、一九八五年）
海外視点・日本の歴史6『鎌倉幕府と蒙古襲来』（ぎょうせい、一九八六年）
角田文衛編『新修国分寺の研究』第5巻下・西海道（吉川弘文館、一九八七年）
海津一朗『中世の変革と徳政』（吉川弘文館、一九九四年）
海津一朗『神風と悪党の世紀』（講談社現代新書、一九九五年）
角田文衛編『新修国分寺の研究』第6巻・総括（吉川弘文館、一九九六年）
追塩千尋『国分寺の中世的展開』（吉川弘文館、一九九六年）
『日本歴史地名大系』鹿児島県の地名（平凡社、一九九八年）
対外関係史総合年表編集委員会編『対外関係史総合年表』（吉川弘文館、一九九九年）
川口素生『北条時宗と蒙古襲来がわかるQ&A』（竹内書店、二〇〇〇年）
江戸東京博物館ほか『北条時宗とその時代展』図録（二〇〇一年）

神奈川県立金沢文庫『蒙古襲来と鎌倉仏教』（二〇〇一年）

川添昭二『日蓮と鎌倉文化』（法蔵館、二〇〇二年）

佐伯弘次『モンゴル襲来の衝撃』（日本の中世9、中央公論新社、二〇〇三年）

瀬野精一郎『神風』余話（同上付録、二〇〇三年）

川添昭二『中世九州の政治・文化史』（海鳥社、二〇〇三年）

溝川晃司『文永の役・「神風」発生の有無について』（『法政史学』第60号、二〇〇三年）

坂井法嘩『日蓮の対外認識を伝える新出史料』（『金沢文庫研究』第三十一号、二〇〇三年）

川添昭二・吉原弘道編纂『大宰府・太宰府天満宮史料』補遺（太宰府天満宮、二〇〇六年）

鍛代敏雄『神国論の系譜』（法蔵館、二〇〇六年）

鹿児島県歴史資料センター黎明館『祈りのかたち——中世南九州の仏と神——』図録（二〇〇六年）

新井孝重『蒙古襲来』（戦争の日本史7、吉川弘文館、二〇〇七年）

呉座勇一『戦争の日本中世史』（新潮社、二〇一四年）

服部英雄『蒙古襲来』（山川出版社、二〇一四年）

服部英雄『蒙古襲来と神風』（中央公論新社、二〇一七年）

【付記】 小稿で取り扱った諸史料のうち日蓮宗関係の史料については、公開講演後に、堀部正円氏より関係論文の御送付と懇切なる御示教を頂戴しました。小稿の記述に誤解があれば、すべて私の責任であることを明記するとともに、ここに厚く御礼を申し上げます。